

新約聖書 ヨハネによる福音書 12章 1節—8節（新共同訳）

¹過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。²イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。³そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。⁴弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。⁵「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」⁶彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心に掛けていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっているながら、その中身をごまかしていたからである。⁷イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。⁸貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「香油の香り」

105歳で亡くなった医師の日野原重明さんは、父親が牧師の家庭で育ち、7歳で洗礼を受けました。そんな日野原さんの生き方には、キリスト教がベースにあったと言われています。

日野原さんは、愛についてこのような言葉を残しています。「愛とは、誰かの心に、希望の灯（ひ）をともすことです」。

本日の福音書には、ベタニアでの夕食の席で、ナルドの香油1リトラ（約326グラム）をイエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐったラザロの姉妹マリアの行いが記されています。その香油は、300デナリオン——労働者のほぼ1年分の賃金にも相当する非常に高価なものでした。

マリアのこの行いは、常軌を逸したものであり、無駄なことをしていると非難して咎める人もいました。単に香油がもったいないという理由だけでなく、人と人の境界線を越えて踏み込んでいくようなマリアのこの行動に、いらだちを感じた人もいたでしょう。しかし、マリアを咎める人がいる一方で、この行いを見ていた人の中には、心の奥深くが揺り動かされ、心に希望の灯（ひ）をともされた人もいたのではないのでしょうか。

イエスへの愛ゆえになされたマリアの行いは、人々を憤慨させる一方で、誰かの心に希望の灯（ひ）をともしものだったのだと思います。

イエスの弟子ユダが、この香油を売って貧しい人々に施すべきだったとマリアを非難したとき、イエスはこう言いました。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから」（ルカ 12:7）。

「葬りの日」とは、イエスが十字架につけられて殺される日のことです。イエスは、ご自身に向けてなされたマリアのこの行いを受け入れました。

マリア本人には、「イエスの葬りの日」のためにイエスの足に香油を注ぐ、という意識はなかったでしょう。しかし、それをすることによって「わたしの葬りの日のため」とイエスに理解させるほど、マリアはイエスと深く心を共有したのです。

弟子たちも、他の人々も、十字架上の死を間近にしたイエスの思いには無頓着、無関心でした。そんななかマリアだけが、孤独の中にいるイエスの心の奥深くに灯（ひ）をともし、イエスとその心を共有したのではないのでしょうか。

ナルドは薬用植物で、和名を「甘松香（かんしょうこう）」といいます。今日（こんにち）でもアロマセラピーに用いる精油として流通していて、「スパイクナード」とも呼ばれています。

イエスの時代にはまだ、蒸気などで芳香成分を抽出して精油を生成する技術は確立されていませんでした。そのため当時は、オリーブ油などに植物をつけた「香油」が用いられました。ナルドはインド・ヒマラヤ地方が原産で、根の部分を使います。当時のエルサレムでは、稀少で、高価な香油でした。マリアがイエスの足にそれを塗った時、家は香油の香りであっぴいになったと福音書に記されています。

旧約聖書では、香油のかぐわしい香りは神の祝福の象徴です（詩編 23:5、イザヤ 61:3）。「家は香油の香りであっぴいになった」とは、イエスの心とマリアの心、そして神の心が一致した、祝福のしるしを表しています（ルカ 12:3）。

さて、3月も終わり、4月に入りました。

日野原重明さんはこう言っています。

「僕の身の上に奇跡が起こったとすれば、その理由はただ一つ、イエスと一体化したことだと思います」

日野原さんは、人生に奇跡を起こすには、まことの信仰をもって奇跡を起こしたイエス・キリストと一体化することが大切だと語りました。

また、日野原さんは自身の心の中で「手を開かれたイエス・キリストの姿を静かに思い描いている」のだと述べています。

あなたが、イエス・キリストの姿を心に思い描いた時、あなたの内にどんなキリストの姿が浮かんできますか。

両手を合わせて微笑みながら天を見上げているキリストの姿でしょうか。それとも、両手にある十字架上での釘の跡が光り輝いているキリストの姿でしょうか。

浮かんでくるキリストの姿は、人によって様々でしょう。

あなたの中に浮かんでくる、そのキリストの姿を、あなたの心のうちで輝かせてください。

愛とは、誰かの心に、希望の灯（ひ）をともすこと。

誰かの心に、希望の灯（ひ）をともすことは、主イエス・キリストの心に希望の灯（ひ）をともすことでもあることを、私たちはいつも覚えていましょう。

常識的に考えれば、一度に全部足に注ぐようなものではない高価な香油がイエスの足に注がれたことには、「無制限の恵みと祝福」が表されていると思います。

私たちは、日々、悔い改め、試みの中にいる時も、喜びの中にいる時も、主イエス・キリストとひとつになって、共に歩んで行きましょう。

お祈りをいたします。

天の神様。いつも私たちを見守り、私たちと共にいてくださりありがとうございます。私たちが、あなたによって与えられる愛と恵みに心を開き、隣人と歩んでいくことができますように。御子イエス・キリストによって祈ります。

アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 43 章 16 節—21 節（新共同訳）

¹⁶主はこう言われる。海の中に道を通し／恐るべき水の中に通路を開かれた方
¹⁷戦車や馬、強大な軍隊を共に引き出し／彼らを倒して再び立つことを許さず
／灯心のように消え去らせた方。¹⁸初めからのことを思い出すな。昔のことを
思いめぐらすな。¹⁹見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えて
いる。あなたたちはそれを悟らないのか。わたしは荒れ野に道を敷き／砂漠に
大河を流れさせる。²⁰野の獣、山犬や駝鳥もわたしをあがめる。荒れ野に水を、
砂漠に大河を流れさせ／わたしの選んだ民に水を飲ませるからだ。²¹わたしは
この民をわたしのために造った。彼らはわたしの榮譽を語らねばならない。

新約聖書 フィリピの信徒への手紙 3 章 4 節 b—14 節（新共同訳）

^{4b}だれかほかに、肉に頼れると思う人がいるなら、わたしはなおさらのこと
です。⁵わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニ
ヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファ
リサイ派の一員、⁶熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のう
ちどころのない者でした。⁷しかし、わたしにとって有利であったこれらのこ
とを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。⁸そればかりか、
わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他
の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いまし
たが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、⁹キリストの内に
いる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではな
く、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があり
ます。¹⁰わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかっ
て、その死の姿にあやかりながら、¹¹何とかして死者の中からの復活に達した
いのです。

¹²わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となってい
るわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分が
キリスト・イエスに捕らえられているからです。¹³兄弟たち、わたし自身は既
に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘
れ、前のものに全身を向けつつ、¹⁴神がキリスト・イエスによって上へ召して、
お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

教会讃美歌 75 番「主イエスは十字架に」、70 番「十字架にぬかずく」、
250 番「つくられしものよ」、333 番「山辺に向かいてわれ」。